

Zoom Up

人

昔の紫根染は江戸時代から色あせずに深みを増していく。いつかはそんな染めをしてみたい



沢口 ハル さん

●さわぐち・はる ムラサキの根(紫根)を染料として使う紫根染に取り組む。ムラサキは環境省や県のレッドデータブックで絶滅が心配されている植物の一つ。以前は、市内にも数多く自生していた。自身の工房「流霞道」で日々その技術に磨きをかけ、創作活動を続けている。「はっきりしている性格」と自己分析する。「心を込めて取り組むこと」をモットーとする74歳。大更在住。



南

部藩の紫根は日本一と言われながら、一度は途絶えてしまった伝統の染め物技法「南部紫根染」。草木染の一種で、遣隋使により日本に伝えられたとされ、長い歴史を持つ。沢口ハルさんは、その紫根染に地元八幡平市産のムラサキだけを使い、「西根むらさき」としてその技術を今に伝えている。

旧松尾村に生まれた沢口さんは、着物の仕立ての仕事をしていたが、染め物の面白さに魅了され、趣味で草木染を始めた。そして、隣の旧西根町でムラサキの栽培をしていることを聞き、子どもころからあこがれていた紫根染に取り組むため、現在の地に移り住んだ。

しかし、周囲に紫根染の技術者がいなかったため、県内の染織家を訪ね、多くの書物を読み、沢口さんは独学で紫根染の技術を身に付けていった。紫根染は、サワフタギの木の灰汁に白生地を漬け、3カ月ほど寝かせた後、染料で染めていき、最後に再びあくに漬けるという工程で完成する。沢口さんは「一番気を使うのは、灰汁に白生地を漬けるところ。ここでむらになると、染めでもむらになってしまう」と作業の難しさを語る。色あせないことでも知られる紫根染だが、その色は、年月を経過するごとに深みを増すという。「薄く染まったなと思っても、数年後には深みのあるいい色になっていることもあるし、むらが消えていることもある。それがまたいい」と長く付き合うほど見えてくる紫根染の魅力語る。また、ムラサキの根は、染料としてだけではなく、漢方薬として使われるように体にもいい。「ムラサキの根の味噌漬けなんかは最高だよ」とムラサキの新たな一面も教えてくれた。

沢口さんの今の目標は、後継者を育てること。紫根染を始めたいと思っている人もいて、そのためにムラサキを絶滅させずに残すことにも力を入れていく。まだまだその情熱は色あせない。